

主食への支出

一家計調査（二人以上の世帯）結果より

日本では、旧暦5月を皐月（さつき）と呼び、現在では新暦5月の別名としても用いています。この「さつき」とは、早苗を植える（田植えをする）月であることから「早苗月（さなへつき）」と呼んでいたものが短くなったとする説と、古語では「さ」という言葉自体に田植えの意味があるので、「さつき」だけで「田植えの月」になるとする説があるようです。そこで今回は、主食である米への支出について家計調査の結果からみてみましょう。

減少傾向にある米への支出

1世帯当たり年間の食料に占める米の支出金額の割合と購入数量の推移をみると、緩やかな減少傾向にあり、平成22年の米の購入数量は昭和55年の約半分となっています（図1）。

図1 食料に占める米の支出金額の割合及び購入数量の推移（二人以上の世帯）

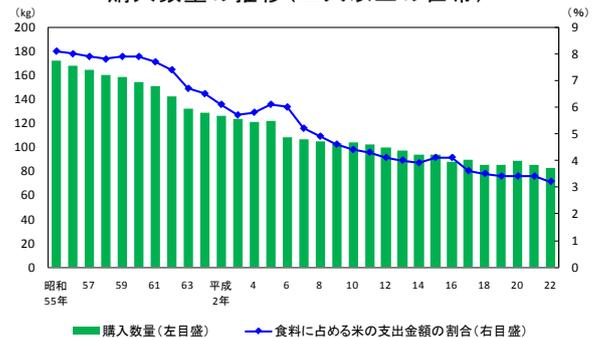
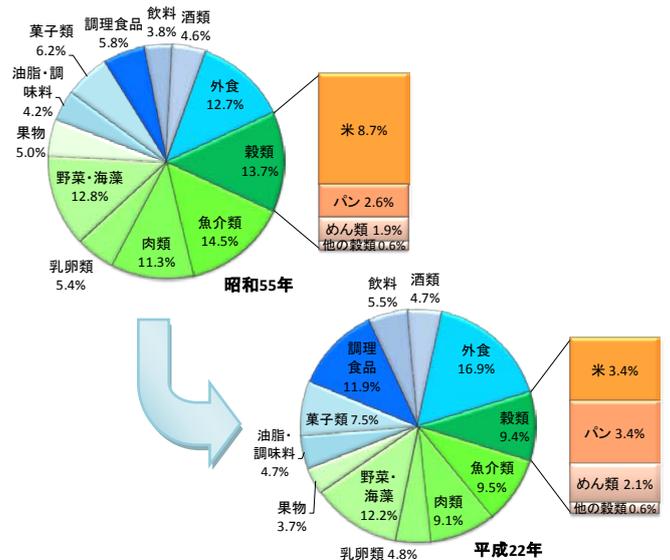


図2 食料に占める費目別構成比（二人以上の世帯）



米からパンへ、素材から調理食品・外食へ

次に、昭和55年と平成22年で、食料費の内訳がどのように変わったかみてみましょう。

昭和55年と平成22年のそれぞれの食料への支出金額を100とした項目別の構成比をみると、昭和55年は、穀類や魚介類、野菜・海藻などの調理前の素材^{注1}となる食品への支出が多く、全体の62.8%を占めています。一方、平成22年をみると、素材の割合は48.8%に減少し、調理食品や外食の割合が増加しています。また、穀類の内訳をみると、米からパンにシフトしていることがうかがえます（図2）。

注1)ここでは、穀類、魚介類、肉類、乳卵類、野菜・海藻、果物を合計したものを素材としています。

米の年間支出金額の1位は静岡市

最後に、1世帯当たりの米への年間支出金額を都道府県庁所在市^{注2}別にみると、静岡市が38,566円と最も多く、全国平均（30,112円）の約1.3倍になっています。次いで、新潟市（37,793円）、浜松市（37,076円）となっています（図3）。

注2)平成19年4月1日現在で政令指定都市であった川崎市、浜松市、堺市及び北九州市を含めています。

図3 米の1世帯当たり年間支出金額の都道府県庁所在市別ランキング（二人以上の世帯・平成20～22年平均）

